

2014 年 9 月 27 日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 5

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

『中国地方誌全文検索叢書シリーズ 海南省 15 種』（(有)凱希メディアサービス(Kaixi Media Service))により、海南島の地方志の中の重要な記事の見落としを発見したので、ここに補足する。

100-ii 〔萬曆〕瓊州府志 卷 3:9b-10b

（『日本蔵中国罕見地方志叢刊 〔萬曆〕瓊州府志』北京：書目文献出版社、1990 年、p32）

漲海

老子曰、海百谷之王也。風俗通、一云潮汐池、一云天池。博物志云、天地四方皆海水相通、然天傾西北、地不滿東南。故史称、炎海中有千里石塘・萬里長堤、茫然一巨浸焉、茹而不吐、滿而不溢、故漲之名歸之。謝承後漢書曰、交趾七郡獻貢皆從漲海出入。則瓊之所謂海者其漲海乎。

海溢俗呼海翻。颶風起西北挾雨、海水須臾高溢十余丈、漫屋淹田、即無大雨、江水漲溢、則田疇積鹹、連年失耕、沿海苦之。

『〔萬曆〕瓊州府志』については、本篇において「疆域」の項における『瓊管志』の引用と「山川」の項での「長沙海・石塘海」への言及について論じているが、そのほかに 100-ii の記事があった。

この条では、南シナ海方面の海が「漲海」とよばれる所以とそのみなぎる海が台風時に海南島にあふれて大きな被害をもたらすことが記されている。「漲海」（「炎海」）のなかに「千里石塘・萬里長堤」が存在するということが記されているが、両者の関係についての説明は明解ではない。下って康熙年間に屈大均が著した『廣東新語』卷 4 水語にも「漲海」と「千里長沙・萬里石塘」の関係が記されているが、こちらの記述の方がわかりやすい。そこでは、「炎海」はよくあふれるので「漲海」と呼ばれる、萬州城の東方外洋に「千里長沙・萬里石塘」があるが、「炎海」が溢れるのを防ぐために天地が設けたものであると説明されている（(清) 屈大均『廣東新語(歴代史料筆記叢刊)』北京：中華書局、1985. P129）。「千里長沙・萬里石塘」について、明末清初には、漲り溢れる南の海に対して天地が設けた堤防という伝説的イメージが存在していたことが知られる。

100-iii 〔道光〕瓊州府志 卷 18:15b

（『中国方志叢書 47 広東省瓊州府志（道光 21 年[1841]修、光緒 16 年[1890]補刊本）』

成

文出版社、1967 年、p417)

#### 萬州海防

自陵水舊陵港北二百二十里、為州屬大洲灣、一名大洲港、東有小洲、遇東風可泊十餘船。大洲灣東三十里、有前後坡、東接大洋、名大洲洋。中有前後嶺・南觀嶺・雙篷嶺・雞冠嶺、皆屹立大海、不能泊船。昔傳、萬州有千里石塘・萬里長沙、為瓊洋最險之處、舟過此者但望即已沉溺、不可救、故土人船師皆不能實指其處。或云即在雞冠諸島之間。

(略)

『[道光] 瓊州府志』についても、本篇において「疆域」の項における『瓊管志』の引用と「山川」の項での「長沙海・石塘海」への言及について検討しているが、100-iii の記事は見逃していた。

ここには南シナ海方面に関する新しい知見が示されている。萬州の北方海上にある大洲島の東方三十里に大洲洋と呼ばれる海域があり、「前後嶺・南觀嶺・雙篷嶺・雞冠嶺」が屹立していることが記されているが、このような記述は今のところこの箇所以外では見えない。方角は不正確であるが、これらが南シナ海方面の岩礁(?)を指している可能性は皆無ではあるまい。しかし、その場所は船舶の停泊が不可能なところとして認識されているのみであり、詳しい情報はない。

それに続いて従来の南シナ海認識が示されている。すなわち、萬州沿海に「千里石塘・萬里長沙」があり、海南島周辺海域の最難所(「瓊洋最險之處」とされているが、この海域を過ぎる船がこれらの危険地帯を発見したときには既に沈没を免れないので、地方の船乗りは誰もその正確な場所を指示することができないという「危険な海域」「未知の海域」という定番の見解が紹介されている。これを受けて、末尾に、従来名のみ知られていて実態不明であった「千里石塘・萬里長沙」が、雞冠諸島の間にあるのではないかという推測が示されている。

大洲島東方の大洲洋に「前後嶺・南觀嶺・雙篷嶺・雞冠嶺」があるという認識は、何時から存在し、どのくらい一般化していたのか。『[道光] 萬州志』にこのような記述が見られないことからすると、『[道光] 瓊州府志』を光緒 16 年(1890)に補刊したときに付加された情報かもしれない。この点については、今後更なる検討が必要である。『[光緒] 崖州志』(光緒 26 年[1900]) 卷 12 海防志・環海水道((清)張騫, 邢定纶, 赵以謙纂修; 郭沫若点校『崖州志(廣東地方文獻叢書)』[广州]: 广东人民出版社, 1983, p227)には、海南島周回航路が示されている。その中で大洲島の東方の大洲洋に「千里石塘・萬里長沙」があり「瓊洋最險之處」となっているという認識が示されているが、「前後嶺・南觀嶺・雙篷嶺・雞冠嶺」に言及はない。海南島においても地方官僚の南シナ海認識は、19 世紀を通して曖昧なままであったと思われる。